

FlythroughView で冠動脈内に脱落した Stent を検索した 1 例

<sup>1</sup>聖隷横浜病院、<sup>2</sup>聖隷横浜病院

杉村 淳<sup>1</sup>、芦田 和博<sup>2</sup>、新村 剛透<sup>2</sup>、吉野 利尋<sup>2</sup>、中島 啓介<sup>2</sup>、五十嵐 巖<sup>2</sup>、真壁 英仁<sup>2</sup>、河合 慧<sup>2</sup>、山田 亘<sup>2</sup>

【はじめに】 FlythroughView は、SJM 社の OCT OPTIS Metallic Stent Optimization バージョン E.4 (以下 E.4) に搭載される 3D 構築像で、内視鏡のように血管内腔を内側から観察することができる特徴を持つ。【目的】 Stent は、約  $\phi 0.9\text{mm}$  にラッピングされており、石灰化病変で脱落すると angio や IVUS では視認性が悪い。一方 OCT は解像度が高いため、脱落した stent の観察に適していると考えられる。今回、E.4 に搭載される FlythroughView で脱落した Stent を発見できるか検証した。【方法】 症例は、高度石灰化を伴う LAD の病変。#7 病変へ Stent を delivery する際、#6 で device 不通過となり、Stentballoon を体外に戻したところ、Stent が脱落していた。脱落したと思われる部位が石灰化上であったため、angio では確認できなかった。脱落した Stent が乗っていると考えられる 1 本目の guidewire を残した状態で、2 本目の wire を parallel で挿入し、OCT にて冠動脈内を観察した。【結果】 OCT および FlythroughView を用いることで、脱落した Stent が #6 で留まっていることが分かった。【考察】 FlythroughView を用いると、内視鏡像と同じように Proximal 側から 1 本目の wire を追いかける形で冠動脈内を観察できるため、Stentstrut 強調を組み合わせることで、脱落した Stent を発見することができたと考えられる。【結語】 E.4 は、Stentstrut の強調表示と FlythroughView を組み合わせることで、冠動脈内に脱落した Stent を検索する際に力を発揮した。